第三章　原始時代の福生

一　福生に住んでいた祖先の遺物

福生町の石器の出土地は、大きく分けて三つになる。一つは福生町本町、埼玉銀行あたりから第一小学校裏手一体、砂利線の南附近一帯で、丘の北西端には神明神社が鎮座され、遺跡に対する感を深めるものがある。すなわち第二段丘面に遺跡が見られる。この段丘面の標高は一三〇メートルで第三段丘面との比高が二・五メートルとなり、緩い傾斜をもった土堤で区切られ、土堤の北端の中腹下、すなわち前に述べた神社の近くからは湧水が長い堀を穿ち流れている。これに関係してか、附近の部落に長沢の地名がある。

この段丘上に湧水のあることは、多摩川を合せて、ここが先史時代の人間の居住した場所とみるのに不思議でない。

近くは、昭和三十五年八月十二日、村野瓦店から青梅街道にむけて七十メートルのところにガス管を埋めるため、深さ一メートル・幅五十センチメートル位に掘ったところ打製短冊形の石斧二つ、および加曽利E式土器片が蜜柑箱に半分ほど出てきた。また、今春福生一小で土器を集めたところ、池田医院の附近から蜜柑箱に一杯ほど、加曽利E式土器と少量の勝坂式土器片を集めてきている。

また、神明社裏側から福生一小の西側を通って昭栄堂菓子店に通ずる幅三メートルほどの道がある。その道の西側一帯

を林山といったらしい。この林山から今でも時々出土する。特に多いのが、神社から学校辺までで、さつま掘の頃、貯蔵の穴を掘るため土を掘っていると、よく土器にあたるとは、あの辺の土地を所有している人の総べての話である。所有者の坂本浩太郎氏の所にも破片であるが、「勝坂式」「加曽利E式」のものが五・六片あった。

福生地内の地表面に散布していた土器片を福生中生徒の手によって集めたところ、大小片合せると数えきれないほどの数である。残念ながら現在のところ、一体として整った土器は本地域では見ることができない。

さて蒐集した土器片について三十二年夏以来、数度にわたり日本大学考古学会員の来地を願い分類考証を試みた。

これによると、その大多数が「勝坂式土器片」と「加曽利E式土器片」に分類された。その他いずれの形式に属するものか、一片だけでは判別できないものもあった。しかし、推定するところによれば、「勝坂」「加曽利」形式の移行期か、あるいは、この時代を遠離したものではないだろうという意見の一致をみた。

第2表

○石斧	
・下広形（撥形）	八
・短冊形	二九
・柳葉形	二
・分銅形	八
○土掻き	一
○石槍？	二
○石匙	二
○異形	四
○その他破片類	

次に、石器について整理したのは五十二個で、その形式は様々なものがあり、これを総括し利器の面から推定し分類すると上表（第2表）の通りである。これらの石器の製法は総てが打製によるもので、用材は、砂岩・硬砂岩が主で、わずかに粘板岩・チャートが用いられ、いずれもこの附近に分布する岩石が用いられたようである。

福生一小の理科準備室にも相当数の石器類があったことがわかる。たとえば「五十二、打・縄中・福生村清の岡神社」というように石斧に記されてあるのを見ても五十二個はあった筈で

ある。残念ながら現在までの調査では、西秋留とか多西とか大塚、三ツ木とか、福生から出土したものが少い。中学生たちの蒐集したものにも他町村のものが、混っていないとは断言できないが、縄文中期の石斧は前記の外にも、福生志茂一二三番に住む井上九万兵氏宅でも二十数個蒐集したものがある。

石斧の外に三十八個の石鏃・二個の石槍を見た。また、長沢の佐藤正一氏が石鏃十九と石槍一とを福生四小に寄贈された。いずれも三十年からの長い間にわたって、ほとんどが福生町から蒐集したものである。

ここで二人の話によって主たる場所が、福一小近辺の第二段丘だけでないということがわかった。

すなわち井上氏も佐藤氏も石鏃の主たる蒐集地は武蔵野二一一五（東福生駅南西畑）、武蔵野二二六六（原ヶ谷戸の上、変電所北側畑）、武蔵野二二七六の北方（元東京都山林会の苗圃）、武蔵野二三二三などである。いずれも、第一段丘である。ついでであるが、このとき二氏の話によると、なかなか興味深いものがある。たとえば、武蔵野二三二三の場所で、井上氏が桑の木が不必要になった当時掘っているとき地下八、九〇センチメートルのところから、くだけた石および炭がカマザル二杯も出てきたとのことである。また、佐藤氏は。前記の苗圃から都へ街路樹を搬出するとき一メートル位掘ったところから黒耀石の石鏃が出てきたとのことである。これについて塩野半十郎氏は、どうもあの第一段丘に縄文前期または早期のものが掘り出される可能性が十分あるといわれる。というのは、あの段丘続きの拝島の林の上にある黒土と赤土の境から縄文早期のものが発掘されているし、国分寺からも三カ所も早期のものが発見されている。これが明かになれば、第一段丘に七・八千年前頃、人がいたということになるかもしれない。

次に第三段丘面である。が、これとて疑問の余地がある。縄文前期か、弥生の遺物があってしかるべきである。

また、長沢堀の左右を最も適切な地面と見ている。たまたま、森田八郎氏宅前の敷石らしいものについて調査したが明確な何物も発見できない。塩野氏もたまたまあの場所を疑問視して調査した結果、確証はできないがどう見ても

長沢堀の左右に集落があってよいといっており、また、西多摩運送のあたりから堀の内の土器を発見したといっている。すなわち縄文後期の土器が発見されたという。佐藤氏の言によれば、西多摩運送の五十メートルほど北東の地点、福生六七三番のあたりは三十年ほど前は壁土に大変よい土地であったので、そこを掘っているとき、相当多量の扁平の石が出てきて驚いたとのことである。また、佐藤氏は、海老原家具店の下段の桑畑から石鏃を三、四個発見、先日、六七三番の処から石槍を一個発見している。このように考えると第三段丘もあながち捨てたものでない。

ただ前述のような石器は、運搬が自由のため、他町村のものが相当雑交しているとも考えられる。今後の問題は、遺趾としての確証を得る素材を把握することに方向づけてかからなければならないと考える。

さて、「福生中で蒐集したものについて、石斧については、『日本の石器図譜』を参照して分けたのであるが、中には識別困難な形式のものもあり、これについては、できる限り近似する部類に属させたつもりである。その結果は、短冊形の石器が大部分を占め、続いて下広形・分銅形・柳葉形の順である。製法については前に述べた通り、総て打製によるものであるが、中の四〇％が一方に元石の自然面を残しており、片割りの後、打修正したもののようである。また、分銅形石斧は、括部の強いもの弱いものがある。

石槍と思われるものは、二つほど認められたが、これは双方とも全長約十三センチメートルほどの打製によるもので、全面を細く打ち砕いて製したものと思われ、二面が鱗状に彫られ、中央部より尖端にかけ鋭く流線しており、その機能が知られる。

石匙と認めたものは、二つで、横形打製によるもので形は小さく、約六センチメートル内外で用材はチャートが用いられ、つまみの部分がきれいに整えられている。附記しておくが、石匙は動物の皮を剝ぐのに用いられたものであろうと考えられている。

異形石器として分類したものの一つは、全体が細長く先きの方がわずかに広がっているもの、他は全体が円味をもったものと、二等辺三角形に似た全長七センチメートルほどのものである。

これらは一見、石匙が小形の石斧とも思われないでもないが、緻細に検討してみると別の用途をもっていたようにも思える。また石器図譜を参照してみても、これに類似したものが見当らない。そこで一応異形石器として分類したのであるが、これについて他に同形のものや、名称ならびに用途が報告されていたら、示唆を願いたい。

この石器はいずれも打製によるもので、材質は粘板岩、砂岩、硬砂岩によって作られていて、長い柄（全長十糎）をもった方は全く石斧に酷似しているが、非常に肉の薄いもので、先端の幅の広くなっている部分が特に薄く、両面ともよく平面化され、一層鋭利な感じであるし、あるいは皮剝ぎ等に使用された石器ではないかと考えられる。また、一方の円味をもった石器は、全体を見て中央部が肉厚で周辺が薄くなっていて、下方に刃がつけられていたように思えるが、しかし、刃といっても鋭い感じではなく、むしろ分厚である。したがって微細な物を打ち砕くためのものか、あるいは皮剝ぎに用いたものかその区別は困難である。」（木村東一郎・福生で出掘された石器について、多摩郷土研究第十四号）

石鏃については、井上氏所有の三十八個を分類すると、つぎの通りである。

(1)　二等辺三角形のもの（黒耀石三個）

(2)　二等辺三角形でその底辺が内方に屈曲しているもの（黒耀石六個、硅岩十三個、その他七個）

(3)　ハート形のもの（黒耀石二個、硅岩一個）

(4)　二等辺三角形の底辺から小突起のあるもの（黒耀石一個、硅岩三個）

その他(2)の部のもので概して大型の硅岩二個

佐藤氏の石鏃十九について分類すると、(1)の部一個、(2)の部十一個、(3)の部二個、(4)の部三個、その他黒耀石のもので、その形は一見朝顔の葉のようなもので、その美麗さにひきつけられるものがある。

石鏃の製法は、どうしたか未知であるが、黒耀石の場合は概して簡単にできるらしい。

石槍について、佐藤氏のもの一個、井上氏のもの二個、いずれも福中のものに比較して遙かに小さい。

茨城県広畑から出土したイノシシの腰推骨と、静岡県のしじみ塚から出土したイノシシの坐骨からいずれも石鏃が射こまれたままの状態で出土したということは、石鏃の用途が何であろうと、用いられた弓の強さを物語るよい資料であろう。

石鏃には茎のあるものとないものがあるが、形だけで時代差は今のところ云々できない。ただ有茎鏃は比較的遅く東日本に拡がったということは考えられる。

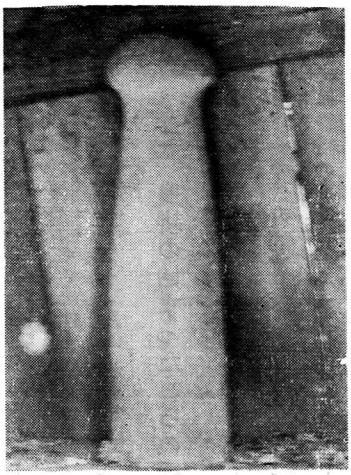

写真3　石棒（内田満蔵氏持祠）

黒耀石が関東地方になく、しかも福生の地に黒耀石の石鏃が多いというのは、黒耀石の産地である信州の和田峠から出る黒耀石を何らかの方法で運んだと考えられる。

土器にしても、形式・模様等考察すると、長野方面のそれと多くの点で類似しているのが認められる。

このことは、原始時代民の本地への移動を考える有力な研究材料として、今後の問題に残されるものである。

また、石棒も永田部落の内田満蔵氏宅の東庭にあるお宮に安置されてある。全長約九十センチメートル位、最初、縄文時代のものか否か疑問に思ったが、都の文化財委員稲村坦元氏の言による

と真物とのことであるので附加しておく。

以上述べた石器は簡単に持ち運びのできるもので、それがあるから人間が住んだと断定できない。住居趾であるとか、貝塚の貝殻の量とか、黒燿石の破片の量等がむしろ人間居住の好条件になるわけである。

今のところ、福生町内では住居趾は発見されていない。これは今後の調査の課題である。

二　農耕の始まったころの福生

わが国で農耕の始まったころの時代といえば弥生式文化の時代と考えられている。すなわち縄文式文化の次の時代のことで、その代表的遺跡は静岡県の登呂である。一体そのころの福生地域はどうであったろうか。この問題を究明するには当時の遺跡なり、遺物の発見をまたなければならないが、残念ながらこの地域ではいまだそれらの発見がないのである。今までに弥生式遺物を発見したということも人の話には聞くこともあったが、それらの確証は得られていない。仮りに一・二発見されたとしても、それだけで弥生式文化の時代を論ずることは非常に危険であるし、意味のないことになる。このことは福生地域に限ったことでなく、西多摩全域についても共通の問題である。たとえば、「技術が大陸から伝えられたりして、だんだん文化も開けましたが、このころになって作られた土器（弥生式土器）は西多摩郡では縄文式土器のように多く発見されていません。」（西多摩郡中学校長会・私たちの西多摩・四〇頁）とか、郷土の土器蒐集家塩野半十郎氏の口述がこれを確証している。この弥生式遺物の発見の少いことは更に西多摩郡内に限ったことではなく、関東地方についてみても「関東地方の弥生式遺跡にして石器を出した例は、あまり多く知られていない。私の予想では関東地方で弥生式の石器を得ることがあまり恵まれなかったのは、関東弥生式の石器製作がかなり短い期間であったらしい。縄文式のそれのごとくに多種多量に作られなかったらしい。竪穴の如き特殊な場所以

外にはあまり依存しないらしい。」（八幡一郎・日本の石器）あるいはまた関東地方で「弥生式文化を知って農耕生活に入ったその時期は近畿・北九州に比べるとかなり遅く、古墳文化伝播の時期とあまり差がなかったらしい。」（山田武磨・日本文化風土記　西関東の章）などによってわかる。

「さて、そうなると果して西多摩地方に弥生式文化時代があったのかどうか疑問も起きるが、しかし少いとはいえ出土した事実があり、しかも一カ所に限られて出土したのではないというのであるから、これは当然弥生式文化があったということは否定できまい。それでは弥生式文化はどのように発生したのであろうか。これはおそらく一般通念であるような、新しい文化を持った人々が後から入って来たということは、この土地の特殊性から考えて卒直に認めることはできない。それではその発生の時代はいつごろかというと、これに関しても種々の説があるが、ともかくこの地方の遺物出土状況や地形の条件、すなわち、(1)縄文遺跡から相当新しい遺物が出る。(2)弥生式遺物が少い。(3)農耕に地形的制約があったのではないか。(4)山境地のため文化交流が遅れた。(5)近在の古墳も後期のものである。などのことから推察して弥生式文化の時代は縄文文化に連結する相当後の時代で、しかも、その期間は非常に短かったのではないかと考えられる。」（木村東一郎・先史時代の研究に関する二・三の私見・多摩郷土研究第十九号）

以上の論述から考えてみるならば、特に福生地域に弥生式遺物が出土しないからといって不思議はないし、またその前時代の縄文式文化の時代は確証されていながら、その後の時代の遺物がないのはおかしいと思う必要はなく、つまり文化の伝播が遅かったこの地域は採集生活であった縄文文化の時代が想像以上に長く続き、おそらく中央での弥生式文化の時代と並行していたのではないかと思われる。従って農耕生活に入りながらも、あるいは道具などの点では、いぜんとして旧時代のものが受継がれていたのではないかと考えられる。